

<国内情勢>

「山下 清」という奇跡

藤井 巖喜 (国際政治学者)

今からそう遠くない昔、この日本という国に「山下 清」という人がいた。

この文章では親しみを込めて、清さんと呼ばせてもらうことにする。

清さんは昭和 46 年 (1971 年) に「満 49 歳」でこの世を去ったから、令和 3 年 (2021 年) が没後 50 年ということになる。清さんは放浪の天才画家として、とても有名な人だった。

所謂「知恵遅れ」の人で、一節によると知能指数は 60 台だったというが、彼の絵の才能はずば抜けていた。画家として…スケッチや油絵…それに陶磁器の絵付け…など多くの作品を残したが、何ととっても清さんを有名にしたのは「貼り絵」だった。彼の「貼り絵」は、まったくハサミを使わないで、指で色紙をちぎって台紙に貼り付ける独自のものである。

清さんの「貼り絵」は、古今東西の美術史の中でも特異な地位を占めるものであり、絵画芸術として世界の一流の作品である。清さんは日本の歴史の中で、最も大衆的な人気のある画家であった。芸術家として一流であり、しかも大衆の人気があるというのは、そうザラにあることではない。人々は、彼の作品を愛するのと同じくらいに彼の人柄を愛した。

清さんは、とにかく愉快的な人だった。清さんの絵は、生きる喜びにあふれている。

清さんの芸術は、生きる喜びを教えてくれる芸術だ。人生には、辛いことや苦しいことも多い。けれど、やはりこの世に生きていることは素晴らしい。そう実感させてくれる芸術だ。しかもその教えてくれる喜びは、決して底の浅いものではない。

今日、それと全く逆の「似非芸術」が如何に多いことか。人の世の絶望を深め、奇矯な表現や次元の低い快感を売る「芸術」だ。日本には放浪の芸術家の伝統とでもいうべきものがある。西行・芭蕉・円空・山頭火など。

皆、この伝統に属する人たちだが、清さんもその系譜に連なる芸術家の一人だ。

清さんが放浪生活をしたのは、昭和15年(18歳)から昭和29年(32歳)の間だ。大東亜戦争から戦後の混乱期である。もっともこの間、常に漂泊したわけではなく「フーテンの寅さん」のように時に家族に顔を見せたり、12歳からお世話になっている精薄児の養護施設である「八幡学園」に戻って、貼り絵の制作に没頭したりしながら、ある日、ふとまた放浪の旅に出てしまうのである。真の自由人「自然児」であった。

世間のしがらみに苦しむ私たちは、時に「放浪」にあこがれる。しかし常識ある社会人に、そんなことは許されるはずもない。「放浪」という自由は、不安・孤独・貧困などの不自由をも意味する。清さんの「放浪」の物語は、芭蕉の紀行文や寅さん映画のように、私たちの漂泊への憧れを満たしてくれる。

戦中から戦後の食糧難の時代だったが、放浪生活中…清さんはちゃんと「物乞い」で食いつないでいる。しかも一回の食事は、茶碗3杯のご飯と決めていたというから、大したものだ。当時の食糧事情から一軒で一杯が「限界」であったろう。そんな時でも清さんは、粘り強く「物乞い」を続け、必ず3杯のご飯を腹中に収めたという。

当時、まだ無名の知恵遅れで、世渡りの上手くない清さんに、何故、そんなことが出来たのか。不思議といえば、不思議なことだ。最もたまには、泥棒と間違われて酷い目にあったこともある。しかし、この一般庶民にとって大変だった時代を清さんは裸一貫で放浪しながらも、ちゃんと食いつなぎ生き延びているのだ。

この不思議は勿論、清さんの人柄にもよるのだろうが、当時の日本という国の国柄の良さとも関係していたに違いない。日本という国が「1つの大きな共同体、1つのシッカリした村」のような存在だったのだ。だから清さんのような無垢な魂でも、無事に生き抜くことが出来たのだ。共同体が崩壊しつつある今の日本で、そんなことができるかどうか。ともかく清さんの芸術は、日本という国があって始めて生み出し得た芸術であるに違いない。

清さんの絵の本質は、一言でいえば「天真爛漫」である。

天から授かった明るい本性が、エゴ(自己中心主義)の暗雲に曇らされることなく純粹…そして無邪気に光り輝いている。小我を超えた大我の芸術、無明を超えた光明の芸術である。

縄文的であり…幼兒的であり…天啓的である。清さんの芸術は、人の心に真っすぐ入ってきて、人の心を輝かす。丁度、赤子の笑顔のように…。

清さんの絵は、茶道・能・狂言よりも遥かに日本的である。そして、同時に世界的でもある。老若男女、国籍を問わず誰にでも愛される芸術である。

清さんは自ら「ぼくは頭が悪い」とハッキリ言っている。しかしこの「頭が悪い」ということについて、私たちはよくよく考えてみる必要がある。清さんお頭の悪さと清さんの芸術との間には何らかの関係が、勿論あるはずだ。しかしその関係はどうも、単純ではないようだ。清さんは頭が悪かったから一流の画家に、なれたわけではない。知能指数が低いから、即、一流の芸術になれるというものでは勿論ない。

清さんは「頭が悪い」には違いないが、抜群の記憶力をもっていた。三年近い放浪をして帰ってきてから、この間の記憶を頼りに「日記」をつけ、貼り絵を作る。凄い記憶力という他はない。英語で言うところのフォトグラフィック・メモリー（写真的記憶力）をもっていたようだ。風景の細部までも再現できる記憶力だ。放浪していた頃の清さんは、スケッチブックなど持っていなかった。清さんがスケッチブックを持つようになるのは、有名になり放浪が出来なくなってからのことだ。

また清さんの絵の仕事への集中力も、素晴らしいものだった。普通の大きさの貼り絵は、大体2週間くらいで作ったそうだが、この間、寝る・食う時間以外は、制作に没頭していたという。一流の芸術家や科学者がもっている集中力と持続力そのものだ。

この点でも、清さんは「頭が悪い」とは言えない。

記憶力も集中力も抜群だった清さんの「頭の悪さ」とは、要は知能テストで図るような「分析的な知性」の欠如であったのだと思う。それは「短時間で能率よく事務処理を行なう」ような能力のことである。現代では、コンピュータや人工知能が代替できる類の仕事である。勿論、こういう能力はあるには越したことはないが、人間としての素晴らしさと何の関係もないことだ。

清さんは、有り余るほどの温かい「情」の持ち主だった。まっとうな情緒の人だった。美しいものを美しいと感じ、小さなものや弱いものを哀れと感じる力をもっていた。この情緒力（情的な感受性）では、普通の人何倍も優れていた。だからこそ、世界でも、一流の芸術家になれたのだ。人の心の動きを、知・情・意の3つに分けて考えることがある。

清さんの場合、「情」の面では、抜きんでていた。放浪生活で見せた強い生活力や貼り絵制作での集中力をみると、「意」の面でも常人以上のものをもっていた。

但し「知」は、著しく欠けていた。これはもう1つの立派な個性としか言いようがない。

心の働きも、生命力の働きの1つである。生命力の働きとして考えると、知・情・意の3つの働きの中で最も根本的なのは、やはり「情」の力だろう。

「生きてゆこう」という気持ち自体が、「情」だからだ。これが自覚的になれば意志が生まれ、そこから知性も派生してくるに違いない。清さんは大きな子供だ。多くの人がそう感じた。その印象は正しかったと思う。情緒がしっかり発達しているから、善悪の判断は確かだが、知性の発達が遅れているから、所謂「世の中の常識」が通用しない。大人の創った複雑な決まりは子供である清さんには、もう全く訳の分からない束縛以外の何物でもなかった。

清さんは、そんな束縛を最低限尊重しながら、その束縛の外側で自由に生きたのだった。

知性が未発達だったから、こざかしいエゴが発達せず天から授かった美への感受性を損なうことなく、清さんは天真爛漫の美の世界に遊ぶことが出来た。

だいたい天才というのは一つの特異な才能を突出して発達させた為に、他の才能や世の中への順応性を犠牲にしている存在である。この点、清さんは典型的な天才なのだともいえる。清さんの「頭の悪さ」と清さんの芸術の関係は、一応、そんな風に説明できるのではないだろうか。最もこんな解説も清さんから見れば、こざかしい辻褃合わせ以外の何物でもないのかもしれないが・・・。

現代人は、こざかしい知性が排泄したエゴを自分と勘違いしている。自己中（ジコチュー）病の蔓延である。個性とエゴの違いが、現代人には分からなくなってしまった清さんの芸術に、個性はあるがエゴはない。自己中病の毒素への最良の解毒剤が、清さんの芸術である。

あれだけの純粹無垢な芸術を生み出すには、知性の未発達という代償を払う必要があったのかもしれない。目の不自由な人が音に対する素晴らしい感覚を発達させていたりする。

モーツァルトの文章はとても下手だった。モーツァルトは自分の表現は全部、音楽にってしまうわけで、彼の言語能力の発達レベルは決して高いものではなかった。

知性ということを現代人は、何か一番価値があることのように思っている。そして現代人の考えている知性とは、突き詰めてゆけば「要領よく金儲けする才能」という程度のことなのだろう。知性の劣ったものをバカにするというのも間違いである。知性を学問的知性というまともな意味に理解しても、知性は人格の上下とはまったく関係ないし、その発達の度合いは全く相対的なものだ。

物理学の分野では、アインシュタインやニュートンから見れば私たちは皆、知性の劣った絶望的な存在だろう。数学の分野では、ガウスやリーマンやアーベルから見れば私たちは皆、救いようのない知恵遅れなのに違いない。たった1本の物差しで、人の価値を図るなどというのはバカげたことだ。

知恵遅れの人というのは、必ずある一定の確率で生まれてくる。これは、神様が人間に与えた「なぞかけ」のようなものだ。能率第一・金儲け第一の考え方からすれば、これらの人たちは社会のお荷物でしかない。神様は人間に、知恵遅れの人たちも含めて「幸せに生きられる世の中を作りなさい。能率第一ではなく、真善美を第一とする人の絵を作りなさい」と教え、論しているのではないだろうか。私にはそんな風に思えてならない。

競争社会を止めろといっているのではない。競争は進歩の為に必要だ。でも競争だけの世の中になったら息苦しくて生きてゆけない。競争は人生の一部だ。人生のすべてではない。

競争社会や競争人生の外側に、社会や人生のもっと大きな意味がある。

清さんと普通の人との会話は、いつもユーモラスだった。そしてこのユーモアがもつ意味は、結構深刻だ。清さんは穢れのない幼児の眼で、虚飾に満ちた大人の世界を見ている。

だから大人の世界のインチキ性がよく見えてしまっている。清さんの残した文章は、その独特の文体とユーモアが素晴らしい。清さんの文章も、日本文学史上に残る傑作である。

清さんは子供のように「何故、何故」と物事の理由を尋ねる。大人は始め、おざなりに答えているが、やがて答えに詰まってしまう。そして自分の「無知」に気が付く。

清さんは「王様は裸だ」と叫んだ子供のようなものだ。また、清さんの問いかけは、無知を装ったソクラテスの問答法のようにも思える。無知という最高の知恵をもった清さんを通じて、神様は普通の人々を教え、導こうとしたのかもしれない。そう考えると、清さんは天からのお使い、つまり「天使」のようにも思えてくる。清さんの心には濁りが無い。

きっと太古の日本人の心も、清さんの心のように濁りがなかったに違いない。だとすれば、太古の日本人が現代の殺伐とした日本に、生きて蘇ったのが清さんだったのかもしれない。日本は、本当はどんな国柄の国であるかを知らせる為に、神様は清さんを現代日本への「お使い」に出したのだろうか…。そんな風に考えると、清さんの存在自体が奇跡のように思えてならない。天才でない私たちに、清さんの生き方を真似ることはできない。

でも清さんの生き方や作品を楽しみ、それを愛することは出来る。

清さんは「おむすび」が好きだった。特に「大きなおむすび」が大好きだった。

清さんの残してくれた絵画や文章は「大きなおむすび」だ。

いくら食べても減らない「美味しいおむすび」だ。

清さん

今どこ歩く

花の春

巖喜